

「帰り道」(森絵都)の教材研究

一 はじめに

二〇二四年京都教育大学前期科目「国語科教育演習C」において「帰り道」の教材研究を行った。叙述を分析し、語り手による描写の違いについて考察を行った。また「京都教育大学国文学会」(二〇二四年一月二三日)において発表する機会を得た。本稿は発表の内容をまとめたものである。

教材分析をする中で問題となった「語り手による行動や環境についての描写には、どのような違いが生まれているのか」「1と2には決まった順序があるのか」などの問いについて検討を行いたい。また、紙幅の都合で一部の抜粋となるが、考察の根拠となった叙述の都分析を紹介する。一文一文について丁寧に読み直し、

その中で気になった文章を解釈し直した。

考察の対象とした作品は「帰り道」、光村図書小学校六年生の教科書に掲載されている。誰もが経験のある場所を舞台にとの思いから、学校に通う子どもたちに向けて書かれた短編である。帰り道は必ずしも楽しいものではない。それでも、ちょっとした出来事で「子どもたちの足どりが弾んでくれたら」という作者の願いが込められており、「1」では律「2」では周也とふたりの異なる視点から、それぞれの「帰り道」を語らせるという手法を取っている。歩んでいる道は同じでも、目に映るものはまるで違う。物語を通じてその相違を感じ取り、「人は自分と同じことを考えてはいない」というメッセージに気付くことのできる作品になっている。

* 西村 和花
* 脇本 倖帆
* 山崎 桜子
* 寺田 守

作者の森絵都は一九六八年に東京都に生まれ、早稲田大学第二文学部を卒業。テレビや映画アニメのシナリオライターを経て、一九九一年に『リズム』で講談社児童文学新人賞を受賞しデビューした。同作品で椋鳩十児童文学賞を受賞した。

二 叙述の分析

返事をしないほくに白けたのか、周也の口数もしだいに減って、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすっかりだまりこんでいた。

「白ける」とは、盛り上がっていた気持ちや雰囲気、がしぼんでなくなる。興がさめる。気まづくなる。(日本国語大辞典より)「返事をしないほくに白けたのか」という記述から、二人して黙り込んでしまったのは、律が周也からの話の振りに応じなかったせい、周也のテンションを下げてしまったからだ、と律が考えていることが分かる。また、「しだいに」という言葉から、周也は急に話すのをやめたのではなく、律に話しかける回数が減少していったことが分かる。「だま

りこんでいた」という言葉は「だまっていた」にも置き換えられる。「黙る」には「ものを言うことをやめる。沈黙する。」「黙り込む」には「全く沈黙してしまう。一言も言わなくなる」という意味があり(日本国語大辞典より)、あえて「だまりこんでいた」という言葉を使ったのは、二人の間に会話は一切なく、気まづい空気が流れていることを強調するためだと考えられる。

ほくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだろう。

「ほくより半年早く生まれた周也は」という記述からは、律と周也の誕生日に半年の差があり、律はそれを大なり小なり気にしていることが見受けられる。「小四から同じクラスの周也」と「ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。」から、二人は一、二年の付き合いである。それに従って考えると、小学生の律が、たった一、二年間ほどの付き合いの中で、周也と自分の違いに生まれの早さの差を感じだすとは思えないため、この二人は同じクラスになる前から付き合いがあった

のではないかと考える。

「これからもずっと」という記述から、律はこれまでも周也が「どんなこともテンポよく乗り越えている」と感じていたことが分かる。この記述からも、二人はこの出来事以前からかなり近い関係性だったのではないかと推測できる。

また、「ぐんぐん前へ進んでいくんだろ」という記述から、律は周也の考えをはっきり言葉にできることや、物事を引きずらない態度を「前に進んでいる」と感じていることが分かる。「前に進む」ことは「人として成長すること」だと解釈し、周也がどんな自分とは離れて立派になっていくことを想像していると考えられる。さらに、この文全体から、自分は周也のようになれない、と考えていることが伺え、半年早く生まれ人として先に成長していく周也にコンプレックスを感じていることが分かる。

晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。

「晴れと雨」は、律と周也がギクシャクするきっかけになった「どっちが好き」の話題で登場する「海と山」

「夏と冬」「ラーメンとカレー」等と同様、両者相容れない関係である。律はこの質問にどっちつかずな反応を示しており、周也に「どっちも好きは成り立たない」と否定されたことを気にやっている。

そして「不自然」は「自然に反した状態」を表す。「～すぎる」は度を越していて、到底受け入れられない感覚を表現している。ここでは晴れていたのに降ってきた雨に対し、驚きを示す発言だが、天気のことだけを示しているのではない。雨が降るといふ状況は、二人の間に変化をもたらしている。

本来「晴れと雨」は両立しないものである。それが「晴れ」なのに「雨」の「天気雨」が降ってきたことで、「どっちか」に囚われていた律が、「どっちも」もありだと認められることに気付くきっかけになっている。このことから「不自然」はこの時の二人の関係性に変化をもたらす言葉とも捉えることができる。

単純すぎる自分に恥ずかしくなったのは、笑いの大波が引いてからだ。

「自分に恥ずかしくなった」という表現から、律は

自分の性格についてある程度、「自分はこういう性格で、だからこういう風にあるべきだ」と俯瞰して見ていることが伺える。しかし、「笑いの大波が引いてから」とあるので、常に俯瞰しているわけではないところが小学生らしい。また、「大波」という表現から、律にとってこの周也との笑いは普段の生活で起こる笑いよりももっと大きな、我を忘れるほど並大抵ではない出来事だったと考えられる。

ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。

「軽快」とは、身軽ですばやい様子や、心のはずんだ感じのことをさす。この一文は「ぬれた地面に」という言葉がなくても成り立つが、一見足を取られるぬかるみや泥などの重く不快なイメージが連想されやすい「ぬれた地面」に「軽快な足音」と続けることで、そのギャップが律と周也の関係の好転を鮮明に表していると考えられる。

あわてるほどにぼくの口は動かなくなつて、逆に、足

は律からにげるようにスピードを増していく。

「あわてるほどにぼくの口は動かなくなつて」について考える。この直前の「でも、いい球つて、どんなのだろう。」という自分への問いかけから、周也は言葉が出なくなる。昼休みの失敗から、母に指摘された「会話のキャッチボール」に相応しい言葉を探し、普段の「軽すぎ」で「むだに打ちすぎる」言葉を捉え直そうと、葛藤している様子が読み取れる。

これまで周也は律といることを、少なくともプラスで捉えており、自分の顔を見ようとしない律を気に掛けている。監督が急用だと嘘をついてまで一緒に帰ろうとしていることから、律との関係が崩れてしまうことを気掛かりに思っていることがうかがえる。「足は律からにげるようにスピードを増していく」について考えると、「律からにげるように」は周也が無意識のうちに律と向き合うことから逃れようとする様子を表しており、律との仲が気がかりな分、解決を急げば急ぐほど、落ち着きを失う様子に焦りが見て取れる。「口は」「足は」と主語が「ぼく」でないのは、自分の意志を超えて、考えるより先に体が逃れようとしてい

る様子を表していると捉えられる。

そつと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおつとりと一歩一歩をきざんでいる。

「そつと」という言葉から、周也は勢いよく後ろを振り向いた訳ではないことが分かり、この動作には律に何か働きかける目的がなく、何なら律に気付かれないうように律の様子を観察しようとしていることが読み取れる。実際に、「1」の記述では律はこの時周也が自分に振り向いたことは認知していない。

「やっぱり、今日も」という言葉から、律が普段から「おつとりと一歩一歩をきざんでいる」と思っていることが分かる。

「きざざんでいる」という言葉から、律はゆっくりではあるがふらふら歩いている訳ではなく、一歩一歩に意思があつて着実に進んでいる、という印象を周也が受けていることが伺える。「おつとり」という言葉も、ただ速度を表す「ゆっくり」を使わなかったのは、律が自らのテンポでマイペースに進んでいる、というイメージを読み手に与えるためだと考える。

天気雨——頭ではわかっていながらも、ピンポン球のことばかり考えていたせいとか、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目にはしゅん、無数の白い球みたいにつつたんだ。

文中ではピンポン球は、コミュニケーションにおける一方通行の発話の比喩となっている。そのため、ここでは周也が天気雨のことを「無数の白い球」と捉えているが、この白い球とはピンポン球のことだと考えられる。また、「無数の」とついていることや、次の行に「ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。」とあり、この「無数の白い球」に対して攻撃であると感じたり、怯えの感情や、あまりの多さへの無力感を抱いているのではないかと考えられる。

このことから、周也が自分の感覚として、律が次から次へとテンポよく返事をするのが苦手なことを理解し、また今まで自分が一方的なコミュニケーションばかりであったことに対して罪悪感を抱いていると思われる。

また、律は落ちてくる水滴が雨と気がつくのに時間がかかっていると記述されているのも、律と周也の物

事に対する反応速度の違いが対比として描かれている。

律もいっしょに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をはり上げた。

「ことさらに」とあることから、最初の笑い声よりも、後の方の笑い声の方が大きいことがわかる。律が「笑いの大波」と述べているが、これは周也が笑い声に段階をつけていたことから感じたと考えられる。

心で賛成しながらも、ぼくはとっさにそれを言葉にできなかった。

この場面は言葉を口にするという点において正反對の二人が、律のつぶやきを機に通じ合った瞬間とも言える。いつもは「とっさに」「ピンポン玉を乱打」するように次々と話す周也だが、今回は「たしかに、そうだ。」と律の言葉をかみしめ、受け止めている。相手の言葉を時間をかけてかみしめ、言おうとすること、を即座に否定しない。それが「心で賛成」ということである。

「言葉にできなかった」という部分は、律の「うま

く言葉にできたなら」と繋がる。ふたりが相互に影響しながら、相手を理解するというそれぞれの課題に関して成長していることが分かる。相手の考えていることを理解しようとする姿勢が、律にとっては「分かってもうえた気がした」、周也にとっては「ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない」と捉える結果になっているのではないかと考えた。

三 考察

「帰り道」は、律と周也という二人の語り手が存在する作品であり、前半の「1」の場面では律、後半の「2」の場面では周也の一人称視点で語られる。二人の語り手が語るのと同じ時間軸の同じ出来事についてであり、語り手達それぞれの心情や背景描写から、物語全体が見えてくる形になっている。

ここでは、二人の語り手という特徴に注目し、テーマにも挙げられていた語り手による描写の違いを分析していく。

先に「二人の語り手が語るのと同じ時間軸の同じ出

来事」と記述したが、この作品にはそれに該当しない描写がある。「1」には律と周也が玄関口で出会ってから帰り道を歩き出すまでの描写がなされており、これは「2」には見られない。この描写は作品の始まりとなる部分であるため、明確に「1」と「2」には順番があることが分かる。

次に、語り手の違いによる明確な描写の違いについて挙げていく。これに関して印象的なのは、人物の性格に関わる描写である。「1」のみを読むと、「まるでなんにもなかったみたいに、周也はふだんと変わらない。」や「周也が急にいらついた目でぼくをにらんだんだ。」「返事をしないぼくに白けたのか、」といった描写を見るに、周也は相手の気持ちを察することなく、律に対して高圧的な態度を取っているような印象を受ける。しかし、これらは律の主観が多く含まれる描写であり、「2」を読むと周也が「なんにもなかったみたいに」振舞ったことにはきちんと理由があるし、周也が黙り込んだのは白けたからではなく、律と会話をしようと考え込んでしまったからだということが出来る。同じように「2」を読むと、沈黙を気にしないマ

イペースな性格の持ち主であると周也が律の性格を分析していることが読み取れるが、「1」を読むと律も沈黙を快く思っておらず、上手く言葉にできないことを気にしている様子が伺え、マイペースな性格とは言えないことが分かる。

行動の描写においては、もう片方の場面の描写を補う記述も見られる。「2」の市立公園の遊歩道にさしかかった際の描写で、「そっと後ろをふり返ると」という記述があるが、周也の後ろに律がいる位置関係は分かっても、両者の間にどのくらいの距離があるかは分からない。それが「1」では「ぼくは周也に三歩以上もおくれをとっていた」という記述があることで、二人の具体的な距離感を知ることが出来る。また、「1」の天気雨が降ってくるシーンでは、「うおっ。」「何これ。」という二人が言ったと思われる台詞が二つあるが、どちらがどちらを言ったかは示されていない。しかし「2」では明確に「うおっ。」を周也、「何これ。」を律が言ったと分かる記述がある。環境の描写においても、天気雨に降られる大事な場所の、市立公園の遊歩道についての詳しい描写は「2」のみに見られるた

め、「1」の状況描写を補っていると考えられる。行動と環境の描写の差については、律と周也が何に意識を強く向けているかに所以があると考えするため、人物の意識の違いとも言えるだろう。

これらの描写の違いは、語り手が二人存在する「帰り道」の大きな特徴であると言えよう。一人の語り手が第三者視点で語る作品では、「帰り道」のように語り手の語り手が別の語り手によって答え合わせされたり、補足されることはありえない。「帰り道」も二人の語りを合体させ、正確かつ客観的な事実を一人の第三者視点の語り手が語れば物語は成立はするが、あえてそうはせず、一人称視点の極めて主観的な描写である点が、この作品の面白さであると思う。「帰り道」においてのこれらの主観的な語りは、語り手の意思や考えが多く反映されるため、全く事実であるとはいえないが、語り手を二人に設定することで、二つの記述の共通する部分や相反する部分を探しパズルのピースのように当てはめることで、物語上で実際に起こった出来事や人物の真意が分かる構造になっている。

最後に、「1」と「2」に共通する台詞として、各

場面終盤の「行こっか。」「うん。」の二つが挙げられる。これらの台詞はそれぞれどちらが発したものであるかは、「1」と「2」どちらも記述していない。加藤郁夫はこれについて「あえて、どちらの言葉とも明示しないことで、二人は対等な存在として描かれる。」と分析している。この台詞に至るまで二つの場面が作用しあって具体的な記述を生み出していたにも関わらず、この最後の台詞だけ発言者が分からないことは偶然とは思えない。加藤氏の言うように、どちらが「行こっか。」と言いだしても違和感のない対等な関係になったことを表していると考えられる。

四 おわりに

叙述を丁寧に分析していくことによって、解釈が深まったり広がったりする面白さを改めて感じることができた。国文学会で発表させていただいたことも、とても良い経験となった。学生である私たちの発表に先生方から質問していただく中でよりこの教材に対する理解を深められた。卒業論文に向けてのそれぞれの研

究で今回の経験を活かしていければと思う。

(* 本学四回生)

(** 本学教員)

参考文献

- ・加藤郁夫「物語・小説における一人称の〈語り〉の考察 『帰り道』『少年の日の思い出』『握手』『小さな手袋』の〈語り〉を考える」、『大和大学研究紀要 教育学部編』、大和大学研究紀要教育学部編集委員会、二〇二一年、二九～三六頁
- ・光村図書『小学校 国語教育相談室』特集 作者からのメッセージ「『帰り道』(六年) 二〇一九年 https://assets.mitsumura-toshu.co.jp/5416/7534/5086/kohoshi_s_kokugo_9704.pdf (2024/11/09 最終閲覧)